

舟をつくらうと云ふ考の幼児がありとしますれば、

その子供は木片箱の中から舟をつくるに程よい木片をあまり出して、鋸で切り、のみでついで、舟の形を造り、尙その上に煙突の格好した木片を釘でうちつける等、全く自己の力で材料を選択し、自己の作品の事でありますから、見榮のよいものではありませぬが、子供の満足的情と云ふものは、既成の材料を組み合わせで竣工した時とは比較になりませぬ。

勿論、児童の中には、金鎚で指をたゝいて、「痛つ」と云つて、舐めてゐるのもあり、鋸で指甲を傷けるものもありますが、教師に聞けば、それは極めてまれで、然して、追々に減少すると云ふ事でありました。他の事はしばらくと致しまして、私は同園がこの思ひ切つた仕方を採用してゐるのに對して、少からず敬意を表したのであります。その他英佛等におきまして、幼稚園を少しはのぞいて見ましたが、こゝに殊更にとりあげて申すほどの事もありませぬ、このお話はこれに留めておきます。

○汽車の中で

米原發の上り列車が園府津を過る頃から車中は混雑して來ました。夕暮でした。丁度私の向側に、七歳位の男の子とその父親が席をじめました。その子の隣りには親戚の人らしい若者が居りました。子供はむつぷりとして見えませんでした。ふと、父親はこの子をつれて手洗に行きましたが、やがてまた連れ戻り、今度は自分だけ手洗の方へとドアをあけて行きました。子供は黙つてしばらく窓から外を眺めておりました。お父さんはなかく來ません。すると、子供はドアの方をしきりにのぞき初めました。その眼には既に涙が一杯になつておりました。私がチラとその子の顔を見ましたら何と思つたかグツと涙をのみこんで、また事もなげに窓の方へむいてしまひました。傍の若者はこの子の眼には氣がつかせませんでした。黙つて煙草をふかしておりました。子供は窓框を指でなすりはじめました。暫くたつて、ドアが開き、お父さんが歸つて來ました。この時子供は窓の方をむいたまゝ、ソーツとマントの縁で眼をふきました。お父さんが何にも知らずに席につくと、しばらくして子供はその膝に顔をこすりました。父を待つ間に其の邊をなすりまはつた兩の手に眞黒になつておりました。「汚ない手だね、さあ、洗つて來やう」。お父さんはかう言つてまたこの子を連れて行きました。再び席につくとお父さんはうたゝねを初めました。子供はしばらく父の睡顔をのぞき込んでおりましたが、自分も寝やうとして眼をつぶりませんでした。父親はふと眼をあいて、子供の顔を見て、「風邪ひくなよ」と言ひながら自分の帽子と襟巻ですつかり子供をくるみましました。頼りすがらものゝ鼻ひあこがるゝ心、たよりなささ淋しさから滲み出る涙！私はこの子の涙が束の間に消えたのを本當に幸であつたと思ひました。

(號子)